

山頂を横切る標識の行末を眼で追ったが、そこには何も見出すことができなかった。それから一時間のわれわれの姿は実に滑稽なものであったろう。五人は二列に並んで腰をかがめ、そのあたりの雪面に標識用の竹竿を二十センチメートル間隔に突き指しつつ、亀のようにはろのろと進んだ。そのときの皆の心境は全く神にも折るような気持であったろう。「あった。」中園の竿に手応えがあったとき、思わず歓喜の音が洩れた。竿の先には今夜の我家が小さくたまたま眠っていた。

掘り出したテントを張って、小さな前進キャンプ(A・C)ができあがった。スティールへの道はまだ遠いが、ここが最終キャンプだと思ふと、誰の心中にも静かな闘志が湧いてくる。中園、中村と私の三人が第一次登頂要員としてA・Cに残った。隊長と坂西はA・B・Cへ下って行く。増田、井上はA・B・CからB・Cへ食糧をとり下ったが、今日の暑さで水河の荷上げはさぞ苦しいことだったろう。

スティールを間近に臨んで

丸山からスティールへは一度丸山を下って直下の鞍部(丸山コルと呼ぶ)に達し、そこから左へ迂回する細い尾根をたどって標高約四、〇〇〇メートルの最低鞍部に行き着く。この鞍部から上部がスティール登頂のキーポイントとなるであろう。

A・C設立の翌日、丸山コルの少し先まで偵察を行なった。南西の風が強かったが、天候は申し分ない快晴であった。尾根はほとんど傾斜もなく最低コルへと続いている。コルの向う側で尾根は突然に傾斜を増しており、コルに面して裾を広げた姿は正に白亜のピラミッドと形容できそうな堂々たる構えを見せている。高度の影響のためか三人共余り元気がない。尾根上のコースには特に危険な箇所もないので、緊張させられる場面にも遭遇せず、湿雪に踵をとられながらお座なりに進んでいると、先頭を歩いてきた私の目に信じられぬものが映った。思わず「雪から木が生

えているぞ」と空拍子もないことを叫んでしまった。しかし全くその通りで、前方に四、五十センチメートルほどの木の枝が二本によっきりと雪面に頭を出している。驚いた中村が駆け寄って引張ると、簡単に抜けてしまった。

アプトンが、昨年このルートで骨折した人がいた、と話していたことをふと思いだした。おそらく昨年の登山隊が残して行った標識用のヤナギの木であろう。そんなことを話していると、かすかに爆音が聞こえた。ローガンの方向から飛行機が飛んで来る。見る見る近づいて来たが、高度が高過ぎてよく見えない。アプトンのヘリオ・キュリエエらうか。機は上空で二度旋回して、再び丸山を越えて去って行った。

下方へ目をやるとデニス水河の源頭部が間近に臨まれる。新雪をかぶって白くうねっている水河の表面は到る所に巨大なクレバスが口を開けている。あれがわれわれの所期のルートだったのかと思うと慄然とする。そしてこのただ広い丸山コルの反対側には、水河のサージングでその名も高いスティール水河が突き上げて来ている。数キロメートルも離れているにもかかわらず、猛り狂った水河の表面状態が手に取るように見える。乱立する水塊に土砂が入り混り、それが延々と山峽を縫って蛇行して行く様は実に凄まじい。話しによると水河は一時間に六十センチメートルも速度で流下することがあり、また水河が突如として六十メートルも隆起したり、陥没した例があるそうである。兩岸の山腹には陥没したときの名残りなのか、一定の高度を保って斜面に水塊が残存しているのが見える。

それにしてもこの水河を何度も登り下りしたウッド博士には全く敬意を表するばかりである。三十年余の昔、彼は言語に絶する行軍の後この水河を登りつめ、さらに今眼前にあざやかなスカイラインを描くスティールの東稜の末端から二、四〇〇メートルを登りきった屈強な彼も、今は優しい好好爺になっていることだろう。しかしワシントン北米北極研究所のオフィスで采配を振っている彼の姿を想像すると、彼の一生とセント・エライアスとは何か絶ちがたい因縁で結ばれているように思えてならない。偶然の成行きからとはいえ、われわれの計画に対して心からの激励を送ってくれた博士の人柄には限らない魅力を感じるのである。

雄大なる山々のスケールに圧倒されたのか、われわれの動きは心とは裏腹に遅々としたものであった。一つ一つの行動に今一步の突っ込みが足らず、この日も適当なところで行動を打ち切ってしまった。A・Cに戻ると、増田達が食糧を持ち上げてくれていた。かれらの努力に報いるためにも登頂をやり遂げねばならない。

霧に包まれときに、小雪のちらつく二日間を七人の男は丸山のA・Cと氷河のA・B・Cに分宿して過ごした。こういう天候はこの附近特有のものらしく、全般的にはおそろく悪い天候のうちに入らないものだろう。三日目の朝は十センチメートルの新雪で明けた。相変わらず霧が去来するが、アタックには差しつかえなさそうである。夕方になると大抵の場合霧が晴れること、また真夜中でも薄暮状態が続くことを利用して、今夜アタックを決行することにした。

真夜中の登行

ピンクのヤッケ、オーバーズボン、オーバーシューズに身を固めた三人は、A・B・Cより到着した増田、坂西、井上に見送られて丸山の北斜面を下る。見おろせばステイール氷河のあたりは夕映えに輝いている。ステイールの肩越しにきらめく残光を受けて、三人の装束が赤桃色に光り、新雪の斜面に彩を添える。時計は八時を指している。三時間ほどでピラミッド直下の最低コルに達した。予想外の好調なすべり出しに誰もが登頂成功の確信を深めた。だが屏風のように立ちふさがるピラミッドを前に登路の選定に苦しんだ。何しろ薄闇の中で全体が白色の変化に乏しい斜面はあまりに漠然とした構えで、一向に適切な道を示そうとはしない。結局、現在地から直ちにとりつける斜面をそのまま直登することにした。

ピラミッドの右端にあたるこのルートは次第に傾斜を増し、一步踏み誤れば、地獄の底ならぬステイール氷河へ向って、一、二〇〇メートルの大跳躍することになりそうである。折しも東の空は赤々と燃えはじめ、七月十二日

の朝の早いとて、暗がっている。しかし今なお明けやらぬわれわれの周囲には、登行を阻止するかのようの時折かすかな霧が立ちこめる。そんなわれわれを少しでも援助しようというのか、背後に全く突然に真丸い月が浮び出た。霧を通して鈍く輝く月は、生き生きとした遠くの空とは対称的に、恐ろしいほどの静けさをたたえていた。明るい地球を遙かに眺めながら月の裏側を探索している宇宙飛行士のような心境を味わいつつ、われわれは這い登る。凍りつくような指先の感覚に比例するかのようには、斜面は硬度を加えてゆく。トップを行く中村の速度が鈍った。足下のフカンの踏跡もかすかになり、ただ爪跡のみが黒い穴を残すようになった。益々斜度を加え、硬さの増す斜面に、われわれはアイゼンに履きかえざるを得なかった。この日のためにと研ぎすまされた愛用のアイゼンは快調に高度をかせいでくれる。だがそれも束の間のうちで、われわれの一步一步は次第に覚束無い状態を呈するようになった。露出する氷は斜面の急傾斜と相まって、一步一步に確実な足場を要求しはじめた。打ちおろすピッケルの一撃が苦もなく跳ね返され、わずかな氷の碎片が飛び散る。一步ごとに何度も何度も腕をふるう。かろうじて切りとられた氷のカラカラと乾いた音をたてて落ちて行くのがいつまでも耳に残る。尺取り虫の動きにも似て、われわれの歩度は遅々として進まない。脆弱な氷にはアイスハーケンも役立たず、確保する手段を失ったわれわれには一寸の油断も許されなかった。寒さと緊張の数が時間が過ぎ去り、ようやくにしてピラミッド上部のアイスドームに到着した。朝の光がまぶしい程眼に滲みる小さなテラスには、今なお温もりは到達していなかったが、全力を出しきった身体にはかけがえのない安住の地であった。

氷の世界は終りを告げ、深雪の尾根が待っていた。頭上にはピラミッドの頭ともいえる馬の背が待っている。数十メートルの瘦身の稜線はその頂稜部において全く幅を持たない。切れ味の鋭い刃の上を渡るようにそろそろと進む。左はデニス、右はステイール氷河へと、七十度〜八十度の角度で切れ落ちるナイフエッジをたどる姿は一幅の絵を見るようである。ステイールの三角錐もさすがに低く見え、われわれの肉迫する度合に応じて、その頂角が減じつつあ

った。馬の背を越え、傾斜のない瘦尾根をしばらくたどった。雪はやわらかく、一步ごとに足を引き抜く作業が続く。ステイール氷河側へ張り出す雪庇に、神経をすりへらすのもわずらわしくなってきた頃、尾根幅が広くなり、斜面の勾配も増しはじめだ。

四、三〇〇メートルの朝食

昨夜から十一時間休む間もなく登りつめた身体に太陽の暖かさが感じられ、三人の心は期せずして同じことを考えはじめていた。ある程度の疲労と睡魔、それに極度の空腹感がなせる技なのだが、明るい暖かな小さな鞍部で三人の足は突然動きを止めた。しばらくすると小さなツェルトの内側で、ガスバーナーが快調にうなりはじめ、野菜スープの香りが飢えた者共の鼻孔を刺激する。多彩な朝食のメニューを紐解くのも楽しく、いつの間にか貴重な時間を費してしまった。湯気でびしょぬれになったツェルトを飛び出した目に、ステイールの姿がまぶしく、純白の稜線が翼を広げたように深い藍色の空に浮び出して神々しくさえ思えた。ルカニアの西面の荒々しい形相も、ステイールの南稜のかけに半ば姿を隠し、南方にはセント・エライアス山群のほぼ全山が静かに横たわっている。

頂上へのルートは今や明白だ。眼前の広い雪の斜面を直登し、岩尾根にとりつく。とぎれとぎれの岩稜は真っ直に頂上へ向っている。それも途切れるあたりから、頂上のコーンがはじまる。おそらくそのあたりは水の急斜面をなしているだろう。頂上までは未だ七〇〇メートルの高距を残している。

黄色いナイロンザイルにつながった三人は岩場の末端を目ざして蟻のように進む。日射でゆるんだ雪は相変わらずわれわれにラッセルを強いた。振り返れば馬の背から点々とした足跡が、凹凸のある尾根の縁をたどり、われわれの足元で途切れている。短いようで長い距離だ。丸山の北面がウォルシュ氷河に向かって崩壊した肌を見せている。南面からのまろやかな眺めとは異質のものだ。それにしてもよくもあの頂きから歩き続けたものだ。今日のうちに再び戻る事ができるだろうか。ステイールも今や指呼の間には凍結するが、おそろしく冷たい山は静かに待っている。と身も焼かれつつ、一時間の奮闘の末、岩場に達した。はじめての岩の感觸、高度四、五〇〇メートル。ふと隊長のことを思い出し、あたりの岩肌をさぐってみた。しかし、一片の苔すら発見できなかった。植物の生育の限界を越えているのだろうか。

涙の退却

バラエティに富んだ朝食をたらふくつめこんだのも、つい先程のような気がするのに、すでにエネルギーを消費し尽したのか、足取りが重くなってきた。予期せぬようにあたりが暗くなり、霧が走りはじめた。岩稜沿いに左側の斜面を登る。傾斜は頓に増し、一步毎に腿のあたりまで沈みこむ。われわれは四、五十度の急勾配を、這うようにしてじりじりと高度をかせいだ。風が巻いはじめ、霧の落し子のように、小さな雪片が断続的に舞い落ちてくる。霧を透かして太陽が見え隠れする。すでに青空はなく、灰色の陰気な世界がわれわれを包んでいた。三人の心は次第に陰鬱にかけりはじめ、踏み出すふくら脛にも疲労が蓄積してきたようだ。われわれの行動は、あまり意味のないものとなった。わずかな霧の晴れ間に、遠く離れた左側の岩稜がおぼろげに浮き出す。その姿も一向に変化せず、われわれの進度の低下を示すだけだった。

腰をおろし、トランシーバのスイッチをひねると、隊長の緊迫した声が静けさを破った。

「ローガンの方向にあった低い雲が今は全天をおおっています。ステイールは完全に隠れています。A・B・Cの付近にも、小雪がちらつきはじめました。入山以来の天候悪化時の状況から判断して、今日は完全にくずれる兆候を示しています。……………。私としては退却を勧めます。アタック隊の状況判断はいかがですか。」

十中八九は退却を決意しながらも、どうしてもそれに踏みまきることができず、われわれは登行を続けた。悪いこと

に、ときに頂上が姿を見せるのだ。無駄とは知りつつも、未練たらしくあがきつづけた。結末は以外に早くやってきた。わずかな岩蔭に身を寄せ合った三人の心中は真空状態になっていた。今となっては何も考える必要はなかった。二十時間の努力に終止符が打たれたのである。

風雪のビバーク

冷え冷えとした雪の洞穴に、身を寄せ合って三人がうずくまった頃、穴の外は眼もあけられぬような吹雪の世界が支配していた。宵闇のなかで吹き荒れる風の咆哮と、小さな壻の穴底へ、間断なくさらさら吹き落ちてくる乾いた雪の音だけが耳に聞こえるばかりである。

思い切り悪く踵を返してから、何時間が過ぎたらう。突然に視界をさえぎった嵐の来襲に、行方を失なったわれわれが瘦せ細った尾根の風下に、營々と築いた雪洞。そこが安全な場所であると確認する暇も与えてくれなかった吹雪。ここには大自然の猛威とちっぽけな人間共の取るに足らない所産が共存していた。空気と木に対する細々とした戦いの末、疲れきった肉体と精神が残された武器であった。寒さは感じなかった。われわれはすでに丸一日間も不眠不休の重労働にいそしんできたのである。快い睡魔に身を任せている隙の上に、容赦なく雪が吹き積んでくる。雪の重みはこの小さな洞穴が安住の地になり得ないことを示していた。

息のつまるような苦しさで、三人が同時に目覚めたとき、雪洞の入口は雪の扉に閉ざされ、かすかな明るさが朝の来たことを告げていた。中園が必死になって這いすり出た小さな穴から、冷たく清らかな大気が穴底へ注ぎこまれて来た。吹雪は相交わず全山を馳せめぐり、一向におさまる気配がなかった。昨日の疲れと乏しい食糧のために、全身はけだるく、身体を動かすのが実に億劫に感じられたが、われわれには新しく厄介な仕事が残っていた。すでに雪洞

の洞窟をとおしては、三人共二の扉を踏み、仕事に入るまでには相当の時間を費してしまっていた。誰しも自らトッパッターを引き受ける気はなく、トッパッター辞退の理由づけに真剣に取り組む始末では、何事もはかどる筈がない。雪の中で身動きのできなくなるまで居すわっていたが、ついに重い腰を上げざる得なくなり、不承不承立ちあがったのである。数時間の雪とのたたかいは、体力の消耗をもたらしはしたが、半面、格好の時間つぶしとなった。何しろ道具と呼べるものは全くなき、ピッケルと自分の両手だけが頼りの穴掘りが続けられ、雪を掘っては休み、掻き出しては休みといった有様で、休憩時間が作業時間をはるかに上まわっていたように思う。

完成したお城は予想に反して日雇い仕事とは思えぬ出来栄で、われわれの熱意のほどがうかがわれた。長い廊下の突き当たりのサロンには、三人三様の御座が設えられ、それぞれの位置に満足気に腰を落つけた。周囲の壁には、アイゼンなどを置く道具棚、それに残りわずかな食糧を収納する貯蔵庫などもそろえてあった。ドーム状の天井は高く、腰をかがめれば立ちあがれる程であったが、厚みの不足気味なのが唯一の心配の種といえた。

雪も小降りになりはじめ、時折うっすらと周囲が明るくなる。われわれの心は自然と和み、ガスバーナーの快音もいつもより元気に溢れていた。ランチは長時間にわたって続けられたが、そのメニューの貧弱さは今さらいうまでもない。丸山のA・Cと水河のA・B・Cには、われわれが非常に元気であり、かつ元気がないこと、食糧が非常に欠乏しており、かつバラエティに富んだ食事をとっていることが逐一報告された。かれらはわれわれに幾多の慰めめ言葉を与えてくれたことだろう。それに報いるためにも、われわれの声は弱々しくあわれで、悲劇的に呼応する必要があった。自然の冷酷な仕打ちと人間のか弱い姿を、ことさらに修飾して伝えるには、迫真の演技を要求された。白亜のサロンの三人は、この点に関して卓越した声優を演じてとどまるどころを知らなかった。

夕日が入口への長い廊下の彼方で微笑み、明日の快晴を約束していた。嵐は二十四時間で過ぎ去った。山肌へは降りついていた霧がはぎとられて消えてゆくなかに、黒い小鳥が生気を取り戻したように飛びかっている。中園がそれ

を見て「ああ、実に捕って食いたいよ。」と叫んだ。笑おうにも笑えぬ笑いがもれた。私とて同感だ。朝食、おかゆのもと、おわんに半分、チキンパウダのスープ、コップに半杯。昼食、ココナッツサブレ、二枚、ミルク、コップ半杯。夕食は進行中である。ミルクティ、コップ一杯、レーズン、三〇粒、干りんご、一きれ、そして砂糖なし紅茶、コップ一杯で二時間にわたるディナータイムは終る。大食漢の中國には絶えられぬ責苦らしい。だが皆まことに元気である。中村も元氣を取り戻したようだ。ピラミッドの登りを卒先してリードしてくれた彼は、かなりの精力を消費したのか、昨夜は相当まいっていたのである。

敗走

十四日の朝は予想通りの好天であった増田達三人のサポート隊は、八時半にはすでにピラミッド下の最低コルに到着していた。ピラミッドの斜面は往路を下ったが、やはり水雪の難場で苦勞し、三時間を要した。登りのときは打って交わって明るく、セント・エライアスの隅々までが視界に入り、危険に満ちた下降にも一ピッチ毎に安らぎがあった。一昨日まではなまこのような肌を露出させていたスティール氷河も、今日は白く薄化粧を施し、どことなくゆったりと構えている。コルでは増田達が首を長くして待っているのだろう。誰かがこちらを見上げながら、うろろうと歩きまわっている姿が米粒のように見える。あそこまでたどりつけば、間違なく腹一杯食べられるのだと思うと、いやが上にも心がはやる。

斜面に隠されたクレバス、鈍い光をたたえた氷は足を鈍らせる。薄い雪の層を踏み破った中園が、雪の割れ目に胸まではまりこんで真青になって叫んでいる。「底がありません。」なるほど深い底なしのクレバスは最後尾の一人を呑みこまんとしていた。猿まわしの猿のように、彼は私の足元へ這いずりできて、ニコッと笑った。この程度ならまだ愛敬があったが、中村が空中に浮いたときには、まったく青くなった。その瞬間、彼は不思議なほど無表情に宙

か飛んでいたが、命綱のサングラスだけがキラリと光った。何分私はサングラスの木の急斜面に、確保もできずにかなりうじてしがみついているだけだったから、余計に胆を冷した。彼を「マカオの正」と命名せしめたサングラスは、彼の表情の変化をうまく隠していたのだろうか。何事もなかったかのように、彼は私の傍へ下ってきた。

危い橋を渡りつつも、コッフェルからだだよ出るうまそうなおいにすいよせられるように、斜面を下り、とうとうサポート隊の雪洞へたどりついた。酔をきかせたおかゆがぐつぐつと煮えたぎって、われわれを待っていた。だが楽しみにしていた煙草はかれらの間にも残ってはいなかったのである。

アタック隊の三人と、サポート隊の三人は連れだつて帰路についた。二日間のピバークのあとなので、丸山の登りではつらい苦行を強いられ、私はようやくにしてA・Cにたどりついた。ここに荷上げしてあった食糧も底をついていたので、再度の頂上攻撃用食糧補給のため、サポート隊はB・Cまで一足先に下って行った。B・Cの大テントは今回の吹雪で恐らく相当な痛手を蒙っていることだろう。A・Cのテントも底が深くへこんで、お椀のようになっていたが、その底に石油コンロをすえ、三人はホットケーキの焼きくらべに時間のたつのも忘れて興じた。また熱心な探索の甲斐あって、装備袋の底から封も切られていないピーカンを見つけたときには、三人共小躍りせんばかりの喜びようで、とうとう五時間もホットケーキと煙草のために浪費してしまった。

テントをあとにする頃には、さしもの日の長さも終りを告げ、夕闇がうすら寒くわれわれを包んでくる。山も秋に向って歩調を早めたようだ。疲れた六本の足には雪がまとわりつき、先の長さを思うと、下りといえどもうんざりさせられる。A・B・Cの上部の尾根の末端まで来ると、われわれを迎えに來られた隊長の姿があった。暗闇でお互いの無事を喜び合ったが、心なしか隊長の顔もやつれて見え、われわれの身を案じてまんじりともせず吹雪の数日間を一人過ごされた労苦のあとがうかがわれた。

A・B・Cでは隊長の心尽しのカレライスが待っていた。ピバークの話に花が咲き、話題は今後のアタックのこ

とに移行していった。一定の周期で天候が変化しているとの隊長の天気予報には、われわれも同感であったが、それによると現在の頂上攻撃体制から、次の好天とアタック日を一致させるのは不可能に近いことが実証され、暗い気持ちにさせられた。いまとなつては、天候の変動の周期の狂うことが唯一の望みであった。

快晴に明けた翌日、一同今までの疲労を十分取り戻すべく、昼頃まで眠りこんだ。夕方よりA・B・Cは霧につもまれ、チラチラと小雪が舞いだした。午後八時、ホワイトアウトの中、B・Cより増田、坂西、井上が出迎えの隊長、中園、中村と共に帰ってきた。B・Cのテントは今までも増してひどい打撃を受けていたそうである。ここに七人の一週間分の食糧が到着し、嬉しいことにピースの罐が十八罐も登ってきたのである。これだけの食糧と煙草で、とにかくもステイルの登頂を果さねばならない。すべての条件から判断して、明日からの攻撃が最後のチャンスであることは明白であり、誰の胸にも追われる者のみが味わるあの圧迫感が宿っていた。その夜の相談で、登頂隊員を一人ふやして、坂本、中園、中村そして坂西の四名としA・Cをピラミッド下の最低コルまで前進させることに決定した。明日からの行動の準備は完了し、再度の攻撃の火蓋は切られようとしていた。

最後の挑戦

七月十六日、ホワイトアウトは相変わらず続いていたが、切迫した事態に猶予はできなかった。全員で丸山のA・Cを撤収し、アタック隊員は隊長等に別れを告げ、丸山北斜面をステイルへ向う。北北西の風をまともに受けつつ斜面を下ろうとしたが、霧は益々濃密になり、視界約十メートルの悪条件に迂闊には下れない。標識の旗竿は五十メートル間隔に打ってあるので、必死にそれを捜し求めつつ、四人はあてもなくさまよい歩いた。霧水をつけた赤い旗を見出すたびに、安堵の気持ちに満され、再び勇気が湧いてくる。幸いなことに、われわれは何度かこの斜面を上下した経験があるので、大した寄り道もせずに、一本一本旗を消化して行つた。二十本の旗を消化したわれわれは、ついに強風の吹きすさぶ丸山コルに達した。

雪の止んだ明くる午後、最低コルの手前に最終キャンプを設営した。山肌へはばりついていた濃い霧は今や潮のひくように退きつつあった。それにつれてわれわれは周囲の山や水河と再びつながりを持ちはじめた。霧の衣をはぎとった純白の尾根や水河のうねりに今までも増して親しみを感じた。数日前にわれわれを極度に苦しめたピラミッドの右斜面も、いまは微笑を浮かべて誘っているようだ。しかし今やその誘いに応じる必要はなかった。その左には真すぐに馬の背へ達する急峻な雪稜が薄日を受けて光っていた。最初の試みにおいて、当然採用すべき尾根であったろう。間違いは是正された。傾斜四十度の雪稜に難関はなかった。アイゼンすら必要としない。ピラミッドの攻略はすでに終り、そこからステイルへの道程も半ば以上は手中におさめてあるのと同様だ。われわれの体力と技術、明日の天候、高度との戦い、いずれをとっても希望的観測を許してくれた。さらに、不覚にも煙草をA・B・Cに置き忘れて来たのだが、そのことすらおそらくわれわれの味方となることだろう。

運命の朝は実にすばらしいたずまいを見せていた。ローガンは巨大な胴体を微動だにせず、未だ眠っている。ステイル水河は低く雲をたなびかせ、暗く沈んでいる。だが山々の頂きはさわやかに輝き、その合間にはさまれた水河も、新しい一日の動きを開始している。われわれは足取りも軽く、ステイルへ徐々に肉迫しつつあった。五時間も費したピラミッドだったが、今日は一時間半で済ませていた。トランシーバの交信の声も晴れやかで楽しい。増田と井上は丸山南尾根の末端に陣取って、われわれの行動を逐一注視しているようである。

午後一時には十二日の引返点を通過するほどの快調な進撃であった。十五時間を六時間に短縮したのである。中村、坂西のザイルパーティーは休みもせず、どんどん登って行く。今日は中村も元氣一杯だし、坂西という強力なパートナーを得て、水を得た魚のように生き生きとした動きを見せている。私と中園はそのあとを大した苦勞もせずについて行くだけというずるい方法を終始採用していた。もちろん、今日の得がたいセント・エライアスの景観を逃がすこと

なく眺め尽し、撮影し尽そうと、サイドワークにも怠りなく専念していた。岩場沿いのルートは両側が切れ落ち、傾斜も徐々に増していった。左はデニス水河、右はステイル水河へ何の障害もなく水雪の斜面がのびている。一步誤れば、われわれの柔軟な身体はゴムまりのように、高距一、五〇〇メートルを一気に素っ飛ばさざらう。岩稜の終焉を示す岩峰の左裾はやわらかな粉雪に埋もれている。心許無いあわ雪に腰のあたりまでまとわりつかれ、しばしの間われわれはもがき、そして泳いだ。突然、足は岸に到達したときのように空間に踊り出た。雪の支配する世界は足下に去ったのである。

勝利の瞬間

仰ぎ見れば、頂上のわずかばかりの雪庇の下から円錐の面をおおい尽すように、冷酷な氷の肌がわれわれの足元まで及んでいる。太陽はステイルの背面に隠れ、周囲には冷え冷えとした風が吹きすさぶ。爪先から頭の芯へ向って、全身が凍結せんばかりの寒さが襲って来る。ウツ博士の初登攀ルートの東稜も、手のとどくばかりの近きで、われわれのコースに合致しようとしている。冬富士の斜面を彷彿とさせる状況に四人の動きは突然鈍化したのか、寒さと恐怖はこの記念すべき登攀の時間を思った以上に引きのばすようであった。だが鋭利なアイゼンは忠実な下僕となって、われわれの意志を代行してくれる。風のうなりだけが沈黙を破る緊張の数刻が流れたあと、四人の身体は東稜の上部へまわりこんでいた。

数十メートルが残されているのみだ。頂上をかたどる雪のシルエットを、夕日が黄金色に縁どっている。中村が胸にかかえた八ミリ映写機をいくらか興奮気味に、ぎこちなく袋から引き出し出している。決定的瞬間は一度限りなのだ。一步毎にザイルがゆっくりとのびて行く。私の身体はすでに五、〇〇〇メートルのラインを越えているだろう。短くそして長い時間、疲労も寒さも感じられぬ着実な歩みだけがあった。平静な数分は何事もなく過ぎ去った。太陽が突然に私の両眼を刺すように射込んだ瞬間がすべての終焉を高らかに告げた。私は両手を五〇七メートルの頂上の端っこに突き刺した。七月十八日、午後五時。金色の縁どりを持った私のシルエットは、未だ寒く暗い世界より見上げる三人の仲間の目にまぶしく輝いたことだろう。寒風と緊張に萎縮したかれらも、きらめく太陽と重畳たる山波の囁きを遠からず全身に感じとることだろう。果てしなく長かった道程も終りを告げようとしていた。いや遂に終わったのである。

この記念すべき登攀をわれわれ以上に忠実に見とどけたともいえるのが、はるか下方に待機している増田と井上の二人ではなからうか。この登頂はかれらにとっても、われわれと同様に重大な意味を持っていた。登頂は全員の努力の結晶ともいえる単なる一行為に過ぎない。私の日記には、登頂の様子は一つ記されていない。ここで登頂を伝える増田の記録をひもといてみよう。

「午後五時前、途中から東尾根にトラスパスして、東尾根に立った。頂上は間近である。午後五時、頂上にトッパが立った。次々に頂上に達し、四人目が立った。間もなくトランシーバの交信が始まった。第一声は中村である。言葉が上ずっている。感激しているのであろう。中西隊長が労をねぎらう。山頂の様子を聞くと、中村が、「いや、もう、すばらしいです。ハイッ」という。井上が、「チクショウ」と叫ぶ。サポーター隊員の本音であろう。

空はあくまで青い。その中にステイルが突き立っている。遠征計画の当初から現在に至る苦勞が秘めた喜びよりも、なにかが心の中で大きな音を立ててくずれおちたようである。ひとつのローマン主義の終焉であろうか。「」

神々の眺望

山頂はやはり寒かった。シャッターを押す指先もぎこちなくなるほどだ。だがその眺望は今までになく満足すべきものだった。まずステイルに隠されていた北方一帯の景観がその全貌をはじめてあらわにさらけ出したのである。こ

れまで親しく接していた南方の山々ほどのスケールはなく、膨大なセント・エライアスもその終端部に近いことを示していた。チチナ水河は密雲におおわれ、雲の切れ間のところどころから、汚れた水河の表面が顔をのぞかせている。その雲海も途切れるかと思われるはらかな西の空に、によっきりと頭を出しているのはブラック・バインではなからうか。手前の広い鞍部を隔てて、間近にルカニアの巨大な山容が黒々と立ちはだかり、眺望をとざしている。北西に目を向けると、チチナ水河の向う側、密雲の間から一塊の山頂が薄青く光っている。ホナからベアにかけての山塊と思われるが、標高もステイルに負けないほどで、食指をそそられる山群だ。右に目を移すと、足下より延々と続く鋸のような尾根の先端に、ステイルとは趣を異にした三角形のウッドが、その頂を天空に向けて超然と屹立している。肌を貫く強風と二度と味わぬ景観の板ばさみになって、われわれは進退を決するのにはばしとまどったが、遂に下るべき時刻がやってきた。できることならば一日や二日はこの頂上で過ごし、山々や水河の歌声を聞きたかった。ステイルの周囲を、太陽が一日を周期にめぐるとき、それに呼応する山肌の微妙な移り変わりを飽くことなく眺めていたかった。ルカニアとの鞍部に至る広大で滑らかなスロープで、スキーができれば実に楽しいことだろう。これだけの雄大さと静寂さをたたえたスキー場に巡り会う機会二度と来ないであろう。だが汚れを知らぬ純白の肌に、一寸の傷痕を残すことさえためられた。

思えば、頂上に恐る恐る首を出したときに、真先に目に飛びこんで来たものは、まぎれもなく人間の残滓であった。数本の細い竹竿が冷い風に耐えて、寂し気に頂上の一隅を占めていたのだ。それはわれわれが抱いていた夢を破られた瞬間でもあった。ステイルの頂上はわれわれだけのものではなかったにもかかわらず、自分達だけの神聖な室として、胸深くしまっておきたい衝動に余計に駆り立てられたのである。前人の行為に対して、心の片隅で非難の気持を禁じ得なかったが、やはり頂上に日の丸の旗を埋めた。われわれも同じ行為を繰返したのである。

「ステイルよ、さらば」

暗夜の滑降

ユーコンにも闇が訪ずれる季節に入ったのだろうか。われわれ七人の屈曲した身体は深い霧と闇のなかに溶かし込まれ、その存在さえお互いにつかめない状態であった。何ヶ月もの間背負っていた重荷から、ようやく解放されたのはつい昨日のことではなかったのか。そのときは明るい太陽が常に微笑みを投げかけてくれていた。だが今は闇が行手に立ちふさがり、重荷にあえぐわれわれを鞭打つのである。先導者は増田と井上である。かれらはこのコースを熟知しているよう。八十メートルおきに打ちこまれていた筈の赤旗も、三週間の風雪に力尽きて、その姿を消してしまったものもある。残りの五人はただ先導者の影と声を追って、団子のように固まってついて行くだけである。雪面がようやく斜度を増しはじめたのか、何となく滑る速さも増しはじめたようだ。スキーをV字形に開いて制動をかける。転倒者が続出し、ようやくにして自分自身が進んでいることを確認する。傾斜もある。ベースキャンプはすぐそこに静かに眠っていることだろう。思えば遠い道程だった。ピラミッドの科尔から延々十五キロメートルの行程をたゆみなく歩み続け、懐しのわがテントを見出すのも時間の問題となった。

ステイルの全貌を脳裏に焼きつけようと、何度振り返ったことだろう。かれは西に傾いた陽を受けて変らぬ姿を留めていた。その前面をかざる助稜に沿って、点々と続く踏跡はともすれば見失いがちであった。おそらく、誰しもその眼に光るものにじんんでいたことだろう。丸山の山頂で、われわれの隊列が統一を乱してしまったのも、それぞれの感慨のなせる技だったのかも知れない。ステイルはわれわれの山だった。もう他人ではなかった。無下に振り切って去ることはむずかしかった。ある者は腰をおろして飽きるほどながめ、ある者はただ振り返るだけで、その歩みを止めようとはしなかった。心の中にステイルは生きていた。丸山のなだらかな曲線に、徐々にステイルが隠されてゆくのをみると、後ろ髪を引かれる思いに胸を貫かれるようであった。

そして今、暗夜のスキー行も終焉を告げようとしている。突然にベースキャンプの黒い影が行手を阻み、それは死人のように静かに横たわっていた。底の大きくへこんだ大テントに、再び三週間前の喧嘩がよみがえってきた。深夜のパーティーがいつ終るともなく繰り広げられ、いつしか夜は白々と明けはじめていた。ローガンの頭が朝の到来を告げる頃、二人二人とそれぞれの夢路につきはじめた。ベースキャンプを未だ深い闇に閉ざしているウォルシュ、巨大な陰影は彼の荒々しさの側面をかき消していた。昼も夜も、遠く近く、われわれを支配するかのようには振るまっていた彼も、いつの日か、おそらくは近日中に、われわれの足下に屈することになる。このことは満ち足りた夢路を、さらに充実させるに足るすばらしい贈物となった。

(坂本記)

バージンピーク スキー登山

ステイル登頂を果たして、ベースキャンプに集合したわれわれは、中一日の休養で再び英気を取り戻していた。すでに昨日からウォルシュ登頂のための登路の偵察が行なわれ、遠征の最後を飾るにふさわしい登山をなすべく、周到な準備が着々と進行していた。ウォルシュの登頂に関しては別の項に井上が記すのでここでは省略する。

さて好天は持続し、今日、七月二十一日もまた空は澄みきっていた。ベースキャンプの西にウォルシュと氷河をはさんで対峙する小さなピークは常々中西隊長の食指の的となっていた。キャンプから見上げると、その東面の肌には水塊が荒々しく積み重なり、とても登路を得ることはできない。だが隊長はこの小さなピークに、「バージンピーク」というまことにユニークな名前を冠し、以前から、このバージンを征服したいとのひそかな野望を抱いていたのである。バージンピーク命名のいわれというのは、氷河の源頭部付近より振り返って眺めると、ベースキャンプからの眺望とは打ってかわって、その山頂がなだらかなカーブを描いた女性的な山容を示していたからに他ならない。その純白のきめ細かい肌は頂上へ向ってふっくらとわずかに丸みを持ち、頂点においてかすかな隆起を持っていた。隊長は声を大にして強調した。

「あの曲線は女性の乳房のかたちにそっくりだよ。しかも絶対にバージンに違いない。」

確信に満ちた隊長の言葉に、一同は感嘆の声を洩らしたが、残念なるかな、一人としてバージンであるとの理由を理解するまでに到らなかつたのである。

バージンピーク征服の願ってもない機会が今日をおいて他にはなかつた。「坂西君、行こう。バージンは君のものだ。」隊長の言葉は命名の頃とはちがって、微妙な変化をみせていた。「先生、行きますか。」待ってましたとばかり、彼はいそいそと身仕度をはじめている。「坂本君、君も行かないか。」もちろん異存はなかつた。「先生、僕は一番あとでいいですよ。」

三人はスキーをつけて出発した。気の遠くなるような氷河の横断も、今日は苦にならなかつた。長い雪の斜面をジグザグに切って登り、斜面が急に傾斜を落すと頂上であった。「坂西君、行けよ。」彼は一瞬ためらったようだが、力強く足を踏みしめて最高点に到達した。隊長と私も同じようにあとに続いた。爽快な気分であった。真正面のウォルシュは赤茶けた岩肌を露出させ、今までになく堂々とその両翼を広げている。増田達四人は偵察を済ませたのだから、すでにかれらの姿を見つめることはむずかしかつた。西日を背に受けて、三人は頂上で両手を思いきり振りまわした。氷河の上に映っている白と黒の境界も、心なしかかすかに動いたようだ。

大斜面の滑降こそ、今日の華麗なるフィナーレといえよう。純白の肌に細い傷痕をきざみながら下る。ターンのた